

平成25年度 大学院工芸科学研究科博士前期課程 学位記授与式
学長告辞

本日ここに、学位を取得された皆さんに対し、大学を代表して祝意を表するとともに、皆さんをこれまで、支え、育ててこられたご家族の皆様はじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申しあげたいと思います。そして、皆さんが明日からの新たな道を歩み始めるにあたり、「松ヶ崎から世界に飛翔せよ」この言葉を皆さんに贈りたいと思います。と言うのは、今こそ京都工芸繊維大学は卒業生・修了生とともに、世界に羽ばたき、飛翔しなければならない、また、その絶好の機会が巡ってきたからであります。

京都工芸繊維大学は、昨年秋に、文部科学省から全国立大学86校中12校の一つに選抜されました。これは世界的な競争力をつけ、世界で戦える大学になれ、文部科学省も支援するぞ、という意味です。これはオリンピックの代表選手に選抜されたようなものであり、何としてもメダルを取って世界に冠たる大学にならねばなりません。まさしく大学の名誉であり、誇りであり、すなおに皆さんと喜びを分かち合いたい。こうした絶好の機会が得られたのも、卒業生・修了生、同窓生が各自の分野において努力と実績を積み重ねてきたからであり、皆さんの修了後の活躍についても大いに期待しているところです。

本学の卒業生・修了生は、これまでも、専門分野における基本知識と専門技能をよく修得し、優秀な技術者としてのキャリアを踏み出していきました。これは企業や社会から定評を得ている事実であり、私たちは、皆さんの能力や知識について、自信と確信を持っております。明日からの新たな道を自信を持って歩み出していただきたいと思います。

とはいえ、現実の場面では大学の知名度が低く、悔しい思いをされた卒業生・修了生もいらっしゃると思います。しかし繰り返しますが、個別専門分野において京都工芸繊維大学の实力は認められており、島津製作所や堀場製作所など、京都の優良企業の中でも高い比率で管理職を輩出しています。卒業生・修了生に聞くと、会社では本人が何をなしたかが評価尺度であり、大学の規模や知名度は関係がない、とはっきり答える人が多い。社会に出てからも一般的なイメージや過去の価値観の中に自らを縛りつけてはいけません。それこそが最大の落とし穴になると思います。

ところで大学の活動は、教育・研究・社会貢献の3つの領域から構成されていますが、近年、社会貢献活動の重要性がますます大きくなってきています。

社会貢献はいわゆるボランティア活動を意味するものではなく、COC、COI、COGの3つの旗印のもとに行われる活動を意味しています。COCとは、センターオブコミュニティの略で、大学は地域活性化の核たるべし、COIはセンターオブイノベーションの略で、大学はイノベーションの核となり産業界に寄与すべし、COGはセンターオブグローバルの意味で、国際競争力を増強し、世界で戦える大学になるべし、という意味です。

地域の核としての活動は、具体的には、文部科学省の地（知）の拠点整備事業に採択されたことをきっかけに、京都府と連携して北部5市2町に注力し、また京都市と連携して市内に拠点を整備し地域活性化を行う計画です。COI事業では、文部科学省事業に採択された京都COIのサテライト拠点として、企業と共同してイノベーション事業を社会実装できるように努めています。さらに国際競争力を高めるために、4月から、ユニット誘致と言われる方策で有力な海外大学から講座を丸ごと本学に誘致し、グループ単位で共同教育、共同研究を展開します。逆に留学やインターンシップを活性化するために、海外有力校に拠点を整備し、学部4年次と修士課程を一体的に運用し、外国への学生派遣事業を量質ともに増大する計画です。

このように、京都工芸繊維大学は大胆な大学改革を断行し、限られた資源を有効活用して世界に冠たる大学になるために尽力して参ります。

京都工芸繊維大学は、企業と連携し、言いかえれば修了後も皆さんと協働し、イノベーションを通じて社会変革を推進していきたいと考えています。実際、大学に対して、イノベーションを惹起し、その成果を社会改革に結びつけよ、という期待が非常に高まっています。これまでは、大学の研究成果は学会において発表され、その中から企業が選んで実用化するという考え方が主でありました。しかしこの方法では社会変革はなし得ない、発想を逆転せよ、まず望ましい社会はどのようなものか、近未来の社会像を現実するためにはどのような技術が必要か、既存の技術を活用し、足りない技術は創り出し、理想社会を実現せよ、こうしたことを実行することが大学の役目であると強く期待されています。

ここで注目すべきことは、社会は必ずしも先端技術や学術的オリジナリティーを評価するものではなく、実践的で有用な技術を求めており、既存の技術も躊躇なく活用せよ、ということです。修了生諸君のこれからの人生にとって、研究者、技術者のキャリアにとって何が大切か、どのような価値観で研究活動を行うか、研究活動を展開するエネルギーの源は何か、を考えると、自らの心の内から湧いてくる意欲だけが大切だと考える人もいるでしょう。また、社会や人のために研究を行うことが大切だと考える人もいるでしょう。これまでの大学の価値観では、心の内の欲求に従うことが自主自律の精神であり、社会の要請を研究主題とすることは低く見られることもありました。

しかし、そもそも主体の欲望とは、「自分は何を欲するか」ではなく「他者は私に何を欲するか」であります。平たく言えば、「私の喜びは、自分の欲望が満たされること」というよりも、「あなたに喜んでもらうことこそ、私の真の喜びです」ということになります。「私は他者にとって何であるのか」という問いに対する答えは、「私は他者の欲望に値する」というものです。他者が私に求めること、これに対する応答の積み重ねによって私たちの精神的な核が形成されていくのです。

精神的な核と同様、社会的な核もまた外部からやってきます。私たちは一人一人名前を持っています。固有名詞は個人個人のアイデンティティの核をなすモノですが、名前は自分の選択の余地なく外から名付けられたものです。人生の歩みは自分の名前の中に蓄積されていきますが、その名前は物心がつく前にすでに外から与えられています。

こうした考え方は、パリの精神分析医であるジャック・ラカンの、「無意識は他者の語らいである」という言葉に集約されます。主体の核をなす無意識の領域、自分の核をなす無意識の欲望は、実は言葉によって構成されているという主張です。これはフロイトの発見した無意識の領域を、構造主義の立場から深く探究したジャック・ラカンの新たな人間観と言えるでしょう。

こうした観点を踏まえて言うならば、心の内なる欲求に従う行為だけを、純粋なものとして美化する必要はありません。社会の要請に応える研究、人の役に立つ研究は、尊い行いであり、また自然な行いでもあります。明日から皆さんがどのような技術者として、また研究者としての歩みを始めようとも、現実に対して心を開き、柔軟でしなやかな精神で技術開発や研究開発に取り組んでいただきたいと思います。

結びに当たり、皆さん方が、修了後も大学を愛することを心から願っております。今一度、夏の妙法、晩秋のイチヨウ並木、雪の比叡山、そして桜並木の高野川を思い返してください。母校への愛情は、自らの人生とこれからの活動に自信と誇りを与えます。皆さんは、私たちの誇りであり、京都工芸繊維大学が世界一の大学であるという確信を持って修了していただきたいと思います。

平成26年3月25日
京都工芸繊維大学長
古山正雄